

佛教にも国際的に認められている「国際佛旗」があることを御存じでしょうか。私は佛旗には特別な「思い」があります。

青・黄・赤・白・橙(だいたい)色で配色された(文面上)の旗がそうです。ちなみに(右)写真の旗は、国際佛旗以前に我国



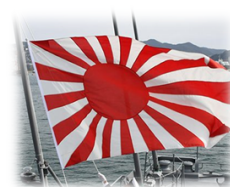
独自で考案されていた佛旗で、緑・黄・赤・白・紫色で配色された「旧佛旗」と呼ばれるものです。京都市内の寺院の門前町で撮影しました。そのお寺の大きな法要の際に掲揚されていました。

旧佛旗は、明治維新の際「廃佛毀釈」の風潮が全国に広まり、佛像や寺院が破壊され佛教界全体が衰退しつつあった時に、「負けないで立ち上がろう！」という兆しを願いながら考案されたものであると聞いたことがあります。ちょうど私の曾祖父が住職をしていたころです。これらの風潮に加え、明治 24 年に岐阜県を襲った「濃尾大震災」で町すべてが壊滅焼失。阪神淡路大震災より大きかったと言われています。曾祖父は当寺再建のために多大な困難に立ち向かったと聞きました。

旧佛旗のデザインに用いられた配色は、お釈

迦さまがお亡くなりになる際に眉間から発せられた「光」だと聞きました。曾祖父は倒壊した本堂の下敷きになりましたが、そこから這い出し、先ず御本尊を必死で探したそうです。そんな絶望的な状況にあった時にお釈迦さまから発せられた光明に導かれ最初の一步を踏み出せたのかも知れません。ご近所、全檀家さんも大きく被災されました。曾祖父は住職を弟子にまかせ、全国をお説教に回る旅に出、再建のために僧侶として一生を奉げました。

「国際佛旗」と「旧佛旗」には多少の配色の違いはありますが、その込められている意味合いはほぼ同じものです。国際佛旗を使用しなければならない決まりもありません。それは「旗」というものは、志をもつ者がそれに立ち向う際、理屈ではなくただ「存在」すること自体が重い意味をもつものだからだと思います。現在、私のお寺では檀家さん等が集まる行事が年間 16 回あります。どの際にも先ずその朝に特大の「国際佛旗」と「日本国国旗」を本堂正面に掲揚します。「日章旗」は政治的な意味に捉えられがちですが、国を築き発展、困難に立ち向かい守ってきてくださったすべての御先祖さまに感謝の気持ちを込めて当寺では掲揚しています。これら 2 旗が風になびけば、「よしゃ！」と口



では発せませんが、すがすがしく「法要モード」に切り替えられるのも「旗」のなせる業です。

「旗」は尊く、どんな理由があってもお互い敬意をはらわなくてはならないし、それを政治に利用してはいけません。 俊徳丸